

かようにどの地区をみても、地先沿岸に棲息するカツオ餌料魚を有効かつ完全に利用しているとは云い難い。それ故先島地区へ火光利用漁具の普及により、従来あまり餌料として利用度の低いイワシ類の大量捕獲が可能となるであろう。魚類の生態に適応した漁具の利用が、現時点では充分とは云えない。

沖縄、先島地区にも今後の新しい餌取り用漁具として小型巻網の導入が期待されている。宮古平良市の一業者が一昨年あたりから餌取り用も兼ねて小型巻網の操業を行っており、イワシ類、アジ類を大量に捕獲できる実績をあげた。しかしながら大量採捕した餌を有効に利用できず、その日だけのカツオ船の需要を満たしたに過ぎなかった。ここに蓄養業なる新しい分野が派生する。すなわち大量に採捕した餌料魚を長期間、大型の網活簀に蓄養し必要に応じてカツオ船に供給する方法である。

かように餌を蓄養し常時供給できる体制ができれば、「餌がないため出漁しない」という現象はなくなるであろう。

水産研究所としてのカツオ餌料調査の指針は、これまで述べてきた問題点を充分検討し調査を継続しているが、調査の目的は、1.現在使用魚種以外の餌魚資源の開発 2.移動、増殖による資源の増開発を行なうこと等である。また網活簀による蓄養試験、船内活間の施設改良による餌の効率利用、活力試験等も実施計画中である。

これらの調査試験の実施にあたり、業者と水産研究所が一体となってお互いの問題だという認識と自覚のもとに調査、試験の遂行、完成を期するものである。

水産業関係者はカツオ餌料の絶対量が足りず、業者は餌の確保に四苦八苦していることは充分すぎる程わかっているが、その積極的な採捕、蓄養繁殖手段を講じようとしなない。さらに加えて、一部の心ない沿岸業者によるダイナマイト、薬物による密漁の横行が今日でも絶えないことは誠に遺憾である。

2 カツオ釣餌料の現況

琉球水研・資源調査研究室

カツオ釣漁業はマグロ延縄漁業と同様に琉球水産業の中樞をなすものであるが、近年漸次漁獲量が減少してきている。関係各界から早急にその対策が叫ばれているが遅々として解決策が見出せない現状である。その隘路となっているものは餌料の円滑な供給策であるが当琉球水産研究所に於いては餌料魚採捕を行い、活力試験や生態調査及び蓄養試験等を実施しているが、調査を実施してからまだ日が浅いので満足な結果が得られず苦慮している現状である。農林局漁獲成績報告によって餌料魚の種類別、地域別の結果をまとめたので問題点の解決に供したい。

全琉カツオ釣餌料の使用状況は1966年度は2728トン、1967年は2695トンであった。月別にみると1966年度は8月がピークで8.5.4トン、7月が7.1.8トンであった。その他の月は3.0トン以下で極めて少なかった。1967年度は6月がピークで6.5.3トン、6月から9月まで